

鳩木節子の後日

甘木数彦

第五章

—

節子は意識の戻らない汽一郎を自分の部屋へ連れ帰ると、フローリングの床に寝かせた。すこし顔色が戻りつつあるようだった。傷も目に見えて浅くなっている。

よく見ると、体の組織が形作られているのが判った。植物の成長を早回しで見ているような、妙な感じだ。自分が変身するところに似ている。

変身を解いて服を着るあいだに呼吸も安定してきた。普通なら傷口を洗って消毒した方がいいのだろうが、急速に回復している場合にそんなことをすると、どんな影響が出るかも解らない。

けっきょく、節子は汽一郎の異常な快復力にすべてを任せることとして、部屋を出た。

向かった先は伊助の部屋だった。ドアを壊さない程度の力で乱暴に叩くと、ややあって伊助が顔を出した。寝ていたようで目は潤み、髪がハネている。

「どうした？」

節子は答えない

「入るか？」

「ええ」

節子は中へ入ろうとして、自分が化け猫の血にまみれていることを思い出した。目先のことに気を取られ、すっかり忘れていたのだ。手で顔をこすると、乾いた血がかけらとなって手に付着した。

居間に入ると少し待つように言われ、伊助は濡らしたバスタオルを持って戻ってきた。

「まず血を拭くといい」

節子はタオルを受け取り、顔や手足を拭いた。お互いに、遠慮というものはない。タオルはすぐ海老茶色に染まる。

「で、どうした？ こんな時間に」

節子がタオルで血を落とし終える前に、伊助は口を開いた。

「化け猫を退治しました。工場跡の空き地です」

節子も髪を拭きながら答える。

「あー。そうか。ご苦労さん。よくやった。じゃあ、死体は処分するように俺から頼んでおくから」

組織と戦っていたときと同じだった。現実化した存在や構成員の死体は、任務終了後に伊助が専用の部門へ連絡して処理させるのだ。

その部門の連絡先どころか、派遣されてくる処理班が政府のどこに所属しているのかさえ、節子は知らない。

「問題が一つあります。汽一郎さんが大怪我をしました」

予想どおり、伊助はそう言われても落ち着いていた。

「どうせあれだろ？ もうおおかた治っちゃったんだろ」

伊助は投げ遣りに言う。

「知ってたんですね。やっぱり。　　どういうことなんですか？」

「どうもこうも。あいつは不死身なんだ」

「でも。私だって伊助さんだって不死身なんかじゃないんですよ」

「それで？」

「だから、その。組織にだってそんなことできないはずですよ」

「ああ。あいつが死なないのは組織と無関係だ」

伊助はそう言うと黙り込んだ。明らかに面倒臭がっている。こういうときは黙っていればいるほど、面倒なことになると思わせるのが一番だった。

なおも言いつのろうとする節子に向かって、伊助は手を振った。

「どうして不死身なのかは俺も知らないよ。ただほら、本人に聞くのが一番だろ。どうせもう起きてる」

それ以上の情報は引き出せないまま、節子は部屋から追い出されてしまった。仕方なく自分の部屋へ戻ると、汽一郎が床に座り込んでいた。

「すまない。いや、ありがとう。化け猫があんなに素早いとは思わなかった。デカイ奴って普通は動きが鈍いはずだろ」

汽一郎の声はかすれていた。節子はコップに水を汲み、差し出す。汽一郎は一息にそれを飲み干した。

「助かった。傷が深いとノドが渴いて」

「で、いったいどういうことなんですか？」

コップを受け取りながら節子は尋ねる。

「んー。不死身ってことだ。いや、そんな冷たい目で見ろなよ。とりあえず、さ。風呂入ってもいいかな？ さすがにお互い血まみれで長話ってのも辛いし」

そこで、節子がシャワーを浴び終えたら汽一郎の部屋へ行くということになった。

汽一郎が暮らす六〇三号室はほどよく居心地の良さそうな家具調度がそろっていた。きちんと片付いてはいないが、散らかっているというほどでもない。

節子と汽一郎はダイニングテーブルを挟んで座った。テーブルの上には二リットル入りのスポーツドリンクと、緑茶のミニペットボトルが置かれていた。

「よかったら、お茶どうぞ」

節子は緑茶のボトルを手に取った。

「さて、どこから話そうか」

汽一郎はそう言いながらスポーツドリンクのキャップを開け、ボトルへじかに口を付けて飲んだ。喉仏が上下し、一度に飲み干してしまうのではないかと思われた。

ややあってボトルをテーブルへ戻すと、汽一郎は口の端をぬぐって大きく息を吐いた。

「俺は、言ってみれば改造人間なんだよ。節子ちゃんや伊助さんと同じような。組織とかいうのとは関係ないけど」

汽一郎は生まれつき不死身だったわけではなかった。一〇歳のころに今のよう肉体を得たのだという。

具体的にどういう処置をされたのかは、汽一郎自身にも知る手立てはなかった。ただそれ以来、どんな目に遭っても決して死ぬことはなく、傷はすぐに癒えてしまう。病気にも

ならず、体力的な限界も大幅に引き上げられた。

伊助と出会ったのは一三歳のときだった。重傷を負い、意識不明の伊助が裏通りで倒れているのを発見して忠春に報告したのも汽一郎だった。

「それでまあ、じいさんと俺とで伊助を手伝うことになった。で、俺は不死身だからさ、何がどうなってるか判らない場所へ真っ先に行って、情報を集めるのが役目だった。こう見えても頭の回転は速いほうだったし。ああ、そうだ。じいさんが俺の育ての親だったのは、誰かから聞いてるか？」

節子はうなずいた。

「そうか。なら話は早い」

政府の支援を受けるようになってからも、伊助と忠春は汽一郎の存在を隠していた。不死身の子供などという存在を政府に知られれば、ロクなことにならないだろうと判断したためだ。しかし、いつまでも隠せるものではない。三人は話し合いの結果、汽一郎を任務から外すことで合意した。

「だから、その資料ってのは俺が死んだことになってから作られたはずだ。いや、俺のことをそのまま報告したわけじゃない。二人が適当に協力者をデッチ上げたんだ。なんだっけな。組織の元構成員だった女が寝返ってとかそんなだったはずだ。もちろん何考えてんだって話になったろうけど、だからって政府としては伊助さんたちを切るわけにいかなかった」

その話は理解できた。節子に対しても政府の人間は、過剰なくらい気を遣っていた。節子が疎外感で悩むほどに。

「誤魔化すのは簡単だったよ。組織のやることって異様なのが多いだろ。だから死体は消え去ったとか喰われたとか。あれ？ 任務中に消息を絶った、だっけか。とにかくそのころには政府が情報を集めるようになってたから、どのみち俺の出番はなくなった。ノーリスクでスリルのあることができ、わりと楽しんでたから残念だったけどな」

汽一郎は話し終えると、手洗いに立った。節子は聞いたばかりの話を頭の中で整理する。遠くで新聞配達のスクーターが、停車と発進を繰り返している。もう四時だ。

汽一郎が戻ってきた。

「肝心なことがよく判らないんですけど」椅子へ座った汽一郎に、節子は問いかけた。「けっきょく、誰がどうして汽一郎さんを不死身にしたんですか？」

「あー。うーん。それはそれでまた長い話で……。またの機会とかじゃダメか」

汽一郎はしきりと両手で顔をこすっている。さすがに疲労と眠気が酷いらしくその顔はむくんでいた。窓の方に目をやると、カーテンの向こうはもう明るい。今は話したくない、という気持ちもあるのだろう。

「すみません。お疲れですよね。判りました。また夜にでも。あ、最後に一つだけ、いいですか？」

「ああ」

「どうして、私を助けに？」

「ここが地元だから。やっぱり気になるもんでさ。毎日、様子を見てはいたんだ。それで今日は節子ちゃんが苦戦してるみたいだったし。ま、正直に言って俺にとっては危険なんて何もないからできることだけだ。怪我したってたいして痛みは感じないし」

汽一郎の口調には、当然のことだという雰囲気があった。そう言われると、節子は自分が馬鹿げたことを尋ねているような気にさせられた。

「じゃあ、ありがとうございました」

節子はそう言うと部屋を出た。気持ちの張りが緩んだのか、汽一郎は見送りに立つこともせず、だるそうに片手を上げるだけだった。

早朝のしっとりとした新鮮な空気を吸って部屋に戻ると、血なまぐさが鼻についた。床には乾いた血が広がっている。窓を開け放ち、床の血を拭き終えて布団を敷くと、時計はもう七時を回っていた。バイトのある日だったら、もう起きる時間だ。外では蝉が勢いよく鳴き、陽光に炙られた風が部屋を抜けていく。

布団に横たわったものの、節子はなかなか寝付けなかった。夏布団の下で何度も寝返りを打ちながら、ぼんやりと浮かんでくる思考に意識を向ける。

どうにもすっきりしなかった。ようやく化け猫を倒したというのに、今度は汽一郎が不死身であることが判って、それで　それでなんだというのか。いったい自分はなにをしたいのか。住民たちを巡るゲームなど放っておけば済むことなのに、いったい何に首を突っ込もうとしているのか。

そもそも、汽一郎が不死身だということが信じられない。最も不可解な技術を持っている「組織」でさえ、そんなことは達成できなていないはずだ。いったいどの誰が。

汽一郎の話や、ここに来てから見聞きしたことを合わせると、候補者は絞られる。忠春と昭平、あるいはその両者だ。忠春が汽一郎を引き取ったのが一〇歳以降のことだという可能性も否定は出来ないが、香奈や汽一郎の口ぶりからするとその可能性は低い気がした。

一番ありそうなのは昭平が汽一郎を不死身に変え、忠春がそれを黙認したという筋書きだろう。それなら、あの二人がやけに互いを評価していたこともうなずける。

すると、忠春や昭平も不死身なのだろうか。得体の知れない昭平なら、ありえることだ。しかし、忠春は怪我や病気をやけに避けているという。不死身ならむしろ、そんなことは気にしなくなるはずだ。一方で、香奈の語った「忠春は戦前からここに住んでいるらしい」という話も、忠春が不死身だと考えれば事実となる。

眠気が思考を満たしていく。いったい何がどうなっているのか、考えても整理できない。却ってややこしさが増すようだ。それでもどこかおかしいという気がしてならない。その正体を特定しようとするうち、節子は眠りの中へと落ち込んでいった。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>